第２部：2004 年10 月30 日（土）10：00～17：50　於 晋州・東邦観光ホテル

６世紀の日韓関係史をめぐって

金鉉球　６世紀の日韓関係を伝える基本史料としては、韓国側の『三国史記』と日本側の『日本書紀』を挙げることができます。ところが『三国史記』には、500 年条に倭人が長峰鎮を攻撃し陥落させたという記事を最後に、倭に関する記事がほとんど見られません。一方、『日本書紀』には、当時の両国関係を示す多数の記事が見られます。したがって、良くも悪くも６世紀の日韓関係は『日本書紀』に依存せざるを得ない実情です。

６世紀の日韓関係は多様なチャンネルと通じて政治、経済、文化等広範囲にわたっていたと考えられます。しかし、まず大和政権と朝鮮半島各国間の交流の枠ともいえる、大和政権と朝鮮半島各国間の関係が明らかになれば、別の交流の性格も明確になるのではないかと考えます。

従来『日本書紀』を土台として、大和政権と朝鮮半島との関係は百済との関係ではなく、任那との関係を中心に展開されていたという理解が通説的な地位を占めてきました。しかし、『日本書紀』による限り、大和政権と朝鮮半島との関係は任那との関係を中心として展開したのではなく、百済との関係を中心として展開し、任那との関係は百済を助ける役割に過ぎないものとなっています。これに対し、そのような内容は『日本書紀』編者の見解に過ぎないもので、なぜ『三国史記』には６世紀に倭に関する記事が見られないのか、という点を考慮せねばなりません。

また、『日本書紀』が百済系史料を中心としており、加耶系史料を反映していないので、『日本書紀』に依存しては、この時代の理解は困難であるとの指摘があります。『日本書紀』には百済系史料が多く反映されていることは事実ですが、『日本書紀』に反映された百済系の史料を除外したといっても、当時大和政権と朝鮮半島各国との関係が、従来の通説とは違い、百済との関係を中心に展開され、任那との関係は百済を助ける立場にあったとする『日本書紀』の内容と大きな違いはないといえます。そして『日本書紀』に任那系史料が見られないという事実が、大和政権と朝鮮半島との関係が任那との関係を中心に展開されたという論拠とならないばかりか、百済系史料が中心をなしている事実は、大和政権と朝鮮半島との関係が百済との関係を中心に成り立っていたとする記事内容を否定できる理由とはならないのです。

大部分が６世紀以前のものですが、『三国史記』には倭に関する記事が 72 個所見られます。そのうち、加耶との関係は一つもなく、百済との関係を示す記事が 10 個所、大部分は新羅との関係を示しています。

このうち、百済との関係を示す内容は大部分が肯定的となっているのに対し、新羅との関係を示す内容は否定的な関係となっています。したがって時代が戻ってしまいますが、５世紀を中心とする『三国史記』の内容も『日本書紀』に見られる６世紀の大和政権と朝鮮半島各国との関係と大きく違わないのです。

歴史的事実の追究は、まず既存史料に対する客観的批判を前提に推論がなされねばならないのです。このような面でも６世紀の日韓関係は、まず現存する『日本書紀』に対する客観的な検討がなされた後に、『三国史記』には、なぜ６世紀の大和政権と朝鮮半島各国との関係が見

られないのか、または、なぜ加耶との直接的関係は見られないのかを検討しなければならいのです。倭との関係が『三国史記』に見られないとか、百済系史料が中心となっているという理由により『日本書紀』に対する検討結果を否定することで、既存の見解をそのまま固守しようとするような態度は合理的だとは言えないでしょう。

人間は現在の立場から過去の歴史を解釈し、その過去の歴史によって現在の自己を合理化しようとする傾向があります。現在の世界は、ＥＵ、ＡＳＥＡＮ、ＮＡＦＴＡ等地域的協力と統合の方向へ進んでいると考えます。したがって、東アジア世界も地域的協力と統合に向け歩まねばならないと考えます。古代日韓関係を新たに論議しようとする意味もここにあるのです。

私は初めて日本に渡って日本史の研究を開始した時、日本の研究成果の壁が高く厚いと絶望しました。ところが、朝鮮半島との関係だけは、合理的理解が困難な点が少なくないことが分かりました。例を挙げると、日本古代史学の先駆者とも言える津田氏や池内氏等が神功紀 49 年条の加耶七国平定や同 62 年条の大加耶再建、顕宗 3 年条の紀生磐宿禰の反乱など『日本書紀』に見られる朝鮮半島南部経営論の柱となる記事の主体を倭と見ると矛盾だらけで成立し得ないと、各論的な記事は否定しながらも、総論的には大和政権の朝鮮半島南部経営を認定している事実を挙げることができます。『日本書紀』に見られる朝鮮半島南部経営論の柱となる記事の主体を倭として成立し得なければ、当然、朝鮮半島南部経営という総論も疑い再検討しなければならないでしょう。そうしていれば、朝鮮半島南部経営に対する論議には大きな前進があったのではないかという残念な気持ちを持っています。

そして戦後の日本の学界が津田氏や池内氏の論理が矛盾していることに気が付いたり、各論的な神功紀49 年条の加耶七国平定や同62 年条の大加耶再建、顕宗 3 年紀の紀生磐宿禰の反乱などの主体が百済となり得るという事実に気が付いていれば、日韓関係の研究にも大きな前進があったのではないかと思います。

私も日本で生まれ、日本で一貫した教育を受けたとしたら、『日本書紀』や『宋書』、広開土大王碑文、『三国史記』などに対し、日本の学界が持っている見解と同じ見解を持ちうると考えます。しかし、お三方は名実共にこの分野を代表し、この分野に対し日本を代表しうる方として、大変僭越ながら、日本史研究の前進のために古代日韓関係史を我々が検討する趣旨という側面からも、既存の朝鮮半島南部経営論を柱のように考えられてきた各論的な記事の主体が大和政権たり得ないという、津田氏や池内氏の解釈を土台とした総論の再検討や、『日本書紀』に限って話をすると、大和政権との関係が任那との関係を中心として成立していたのではなく、百済との関係が中心になっていた、任那との関係は百済を助ける関係にあったという事実に対して、他の問題に対するようにさまざまな角度から精密な検討があってほしい、と切に思います。私自身も主張に矛盾がないか、先生方の忠告を土台として今一度熟考しようと思います。

佐藤　「６世紀の日韓関係史をめぐって」と題して三点ほど話題提供をしたいと思います。

まず第一点目は、『日本書紀』の史料批判はどのように進められるだろうかという問題です。先ほどの金鉉球先生のお話も『日本書紀』の史料批判をどのように進めるかという上での金先生のご研究の成果だと理解しています。

私は、６世紀の日本列島と朝鮮半島の関係史の主要な史料となる『日本書紀』は、８世紀の

日本律令国家の立場で編纂されたものであり、史料批判をした上でなければ用いることができないと考えています。また、最近の日本古代史研究では『日本書紀』に書いてあることをそのまま信じるという立場の人はいないと感じています。したがって、金鉉球先生は「日本の研究界では朝鮮半島南部経営論というものがまだ残っているのではないか」と受け止めておられるようですが、積極的にそういうふうに考えている研究者は、あまりいないのではないかと思っています。むしろ金鉉球先生は、日本の古代史研究者は『日本書紀』を使って当時の倭国と加耶との関係を直接的に見ることはできないだろうということで、研究が『日本書紀』を利用しない方向にあることを危惧されているのだろうと受け止めています。私も金先生と同様、近代的な歴史観で恣意的に『日本書紀』を解釈するのではなく、客観的に事実に接近する必要があり、そのためには日本と韓国双方の研究者でどのような方法を取り得るかを、こういう場所で検討していただきたいと思います。

その際、6世紀の倭と加耶の関係を考える上で、韓国における加耶地域の考古学的な調査成果をどう受け止めるかということが重要なテーマだと考えます。昨日も慶尚大学校の趙栄済先生から考古学のお立場で加耶史についてのご意見を伺う機会がありました。私は、考古学的な成果を踏まえた加耶地域の歴史的展開の展望の上に立って『日本書紀』をもう一度史料批判することができるだろうと考えています。

次に、話題提供の二番目のテーマ、「新しい出土文字資料や考古学的な知見をどのようにとらえていくか」という問題です。加耶地域での考古学的な調査成果だけではなく、栄山江流域の前方後円墳（5～6世紀）や、咸安の城山山城の木簡（6世紀）など、新しい歴史資料が出現してきており、すでに『日本書紀』という文献史料だけでこの時代の日韓関係史を描くことには限界があるのではないかと私は考えています。もちろん『日本書紀』の史料批判という研究もこれから進めるべきですが、それと同時に、主に加耶地域における考古学的な調査成果を踏まえて総合的にこの時代の日韓関係史を見る必要があるだろうと思います。もちろん歴史学と考古学とは学問的な方法が違うという面がありますが、これからは歴史学の側も、新しい歴史資料を客観的にとらえ、日韓関係史を総合的に組み立てていく必要があると私は思っています。歴史学の側が、考古学の成果から自分の都合のよい部分だけをつまみ食いすることのないような研究のあり方をどのように築くかが焦点になってきており、そのためには歴史学と考古学が互いの学問方法の違いを尊重しながら対話する必要があると思っています。新しい研究者は、そういう方向の研究を切り開いてくれるだろうと期待しています。

三点目は、6世紀の日韓関係史に関係して当時の国際関係をどのようにとらえるかという問題です。私は、6世紀の日韓関係をめぐる国際関係が多元的・双方向的な関係であって、それを複眼的にとらえなくてはならないと思っています。6世紀の日本列島・朝鮮半島は、高句麗・百済・新羅・加耶・耽羅・倭などの諸国が多元的に存在しており、それぞれの国の国際関係は中国の南北王朝も含めて多方面・多方位で展開しており、二国関係だけで片付けられない多元性を持っていたと思います。先ほど、金鉉球先生も「6世紀の韓日関係が多様なチャンネルを通じて政治・経済・文化など広範囲に及んだ」と言われました。私は二国関係だけでは当時の東アジアの国際関係は片付けられないと思います。また、その二国間の関係だけを取り上げたとしても、政治的・文化的な強弱にかかわらず一方向の影響にとどまるものではなく、必ず双

方向に影響しあう関係であったと考えます。現代でいえば、軍隊を派遣して侵略したり戦争に勝利したりしたとしても、勝利した国も非常に大きな傷を受けるという双方向の関係が外交の場合では存在しています。

そういう意味で、多国間・二国間の交流の多元的なあり方、多様性をとらえるのには、どうしたらよいか。私たちは二国間でしかものを考えられないような面がありますが、もっと多元的にとらえる場合どういう方法を取ることが可能かということを検討する必要があると考えています。

金泰植　今回の発題として、金鉉球先生からは、『日本書紀』を既存とは違う見方で、百済と倭の関係が中心となっていたということを認め、これを基本として再解釈しなければならないというお話がありました。

そして佐藤先生からは、『日本書紀』の史料問題、新しい出土文字資料問題、考古学的な遺物との関係、多元的な国際関係、このようなことを認識して新たな関係史を研究しなければならないとのお話がありました。また、現在倭の朝鮮半島南部経営論のようなことを積極的に考える人は少なくとも研究者の中にはほとんどいない、また、考古学的な研究成果に立脚して『日本書紀』を再解釈すべきであると述べられました。私には、非常に励みとなるお言葉だと思いました。

現在、少なくとも加耶地域の考古学的成果によると、加耶地域を日本が長い間占領したとか支配したという証拠は全く現れていません。ところが、このような学界の研究傾向とは別に、これが私たちの集まりの基本目的であったと言えますが、一部の教科書等ではいまだにそのような間違った概念が表現されております。それをどのように正すことができるのかということも一度考えてみる必要があると思います。

さらに、最近日本を旅行したのですが、各種案内文に「神功皇后が朝鮮半島を攻撃したときに持ってきた」というような説明文が大変多く、金鉉球先生が述べられた「もし自分が日本で生まれて学んだとすると、それを既成事実のように考えてしまいそうである」という言葉に私も共感します。このような問題も皆さんと論議できればと思います。

私が望むことは、日本の古代国家の発展が朝鮮半島の侵略や支配を基盤として発展したのではなく、朝鮮半島南部地域と大変緊密な文化交流が行われ、それを土台として正常な過程を通じ日本が発展してきたということが明らかにされ説明されることです。それがより望ましい歴史認識ではないかと思うのですが、佐藤先生のお考えをお伺いしたいと思います。

佐藤　まず一点目ですが、日本の学界には、学問の自由ということでいろいろな研究動向があり、教科書に反映するような学界動向の中にも多様な見方があると私は思います。ただし、戦前や戦争直後のように朝鮮半島南部を「経営」（この言葉自体が問題ですが）していたというような見解は、最近ではあまり見られないのではないかと思っています。

そして、金泰植先生が言われた案内板というのは神社などで書かれている説明板のことだと思うのですが、これは神社を信じている人たちがその伝承を書いているものなので、研究が進み歴史学的成果が上がってくれば、それが説明版に反映するということもあるかもしれません。最近の神功皇后を祀る神社の説明板でも、戦前であれば「『三韓征伐』をした」と書かれていたのを、今では「韓国と文化交流をした」というふうに表現されているものが増えている

と思います。しかし、例えば朝鮮半島でいえば檀君神話を信じている人たちもいると思うのですが、そう神話伝承を信じている人たちについて、どうこうとは言いにくい面があるのではないでしょうか。私はこの共同研究の場で話すことではないと思っています。ただし、歴史学的に研究を進めるということはこの研究会の主題だと考えます。

二点目は、一点目や金鉉球先生のお話ともつながると思いますし、次の新しい古代日韓関係史に向けての話とも重なる話題です。それは「経営」という言葉の実態をどう見るか、あるいは「支配」「占領」「影響力」「軍事的支配」といったような言葉の中身の問題です。どういう実態であったかということではなく言葉が一人歩きして、それぞれの人が自分の都合によって用語を使っているように思います。それ以外にも、この研究会でも「主導」という言葉も出てきましたし、「人力売買」「傭兵」という概念についても、それぞれ実態が共通認識されていない言葉だと思います。どういうことがあれば支配なのか、経営なのか、占領なのか、影響力なのか、傭兵なのか、人力売買なのかということを明らかにし、その共通の認識をした上でなければ議論できないのではないかと思います。

濱田　この時間は６世紀の日韓関係史のことだというのに、司会者の金泰植先生は前回の神功紀 49 年条の話をされ、佐藤先生はむしろ午後のほうにも関連する話をされましたので、話題提供者の金鉉球先生が所在なさそうにされています。ここでは『日本書紀』と６世紀の日韓関係をどのように考えるかという史料批判の問題、あるいは現代から古代史を考えるという、現代に制約されているというこの制約性をどう取り払って６世紀の日韓関係史を考えるかという上での問題点をもう少し深く議論されたらどうでしょうか。

『日本書紀』に向かう姿勢

金鉉球　私も佐藤先生に一つ質問をいたします。佐藤先生は「６世紀の日韓関係を考える上で考古学などさまざまな資料を活用するべきであり、文化、経済、社会などの多元的な分野、また二国間だけではなく他国間の関係を考慮しなければならない」と言われましたが、大変妥当なお話であり、私も同感いたします。しかし、私が『日本書紀』の史料批判をどのようにするのかという問題だけを話していますので、昔に執着しているようで、自分でも恥ずかしく思う点もあります。

さまざまな交流の基本枠となるのが国家間の関係だと私は考えます。ところが、これまで末松氏をはじめとする方たちが作られた枠が基本的に通説的な地位を占めてきました。しかし、戦後、それについて多くの問題があることが指摘され、佐藤先生も指摘なさいましたが、そのかつての枠を主張していくには無理があるということが、韓日の学界では共通認識となりました。今の学界では、『日本書紀』をそのまま信頼することは難しいという考えから、新たに発掘される考古学的資料等を通じて解釈すべきだという傾向が主流をなしていると考えます。

ところが、既存の枠が誤っているという話だけをして、新たな枠を提示しないので、暗黙のうちに既存の枠がそのまま認定されているように感じられる部分が多くあります。私は、末松氏を中心として成立した既存の枠と『日本書紀』に関する基本的な事実が過ちであったことを、その後に新たな解釈を試みた人の大部分が認識できていない点も多くあると考えます。したがって、『日本書紀』について末松氏が語っていたことを否定して終わるのではなく、少なくと

も基本的な事実に対する批判をし、その上で考古学的成果を加えなければならないのであり、基本的な史料批判もせずに考古学的成果を加えて解釈しようとするのには問題があるのではないでしょうか。

例えば、過去の大和政権と朝鮮半島の関係は任那を中心に展開されたと認識されてきましたが、『日本書紀』に基づいて話をすると、明らかに百済を中心として展開しました。少なくともこのようなことは訂正した上で、考古学的成果を加えて解釈することが望ましいというのが私の立場です。

もう一つ申し上げます。先ほど佐藤先生は、経営であるとか、支配であるとか、影響力であるとか、このような概念の定義がなければ一歩も進めないとおっしゃいましたが、これは当然のことだと思います。しかし、このような問題は結局、朝鮮半島南部にいた倭をどのように解釈するのかの問題であると考えます。したがって、6世紀に朝鮮半島南部で活躍したとされる倭という存在をどのように解釈するのか、ここに焦点を当てれば、佐藤先生が提案したその問題は論議が十分になされるのではないでしょうか。

石井　お二人の6世紀に関連する話題提供をお聞きし、いろいろと学ばせていただきました。例えば『日本書紀』あるいは『三国史記』『三国遺事』といった基本史料に向かう姿勢というものについて、私自身が改めて感じたことがあります。

金鉉球先生のご論文ならびにお話では、まず『日本書紀』そのものに書いてあることを虚心に考えてみて、それから史料批判を行い、そして佐藤先生の言われるように考古資料等を参考にしながら総合的に判断し、一つの史実というのを組み上げていく。そういう姿勢だというふうに私は感じています。先ほど佐藤先生も心配されましたけれども、『日本書紀』を利用しないという学界の雰囲気をつくることは非常に危険であると私は思っています。これだけ考古学の進展も見られる時期ですから、「これはおかしい」「この記事はあり得ない」という考えで『日本書紀』を読むのではなくて、まず、そもそも『日本書紀』にはどう書かれているのかということを踏まえてから読むことが大事だろうと思います。それは『三国史記』や『三国遺事』についても同様です。そういった私自身の考えに基づいて今回、年表を作成してみました。

ですから私は、基本に立ち返り、改めて虚心な気持ちでそれぞれの史料を読み直し、その上で総合的な判断をしていくことが今求められているのではないかと感じています。

歴史教科書での記述

盧重国　『日本書紀』をはじめとする基本史料を虚心坦懐に見ようというお言葉には私も同感です。

そして、現在までの状況と連関して佐藤先生に一つ質問をさせていただきます。佐藤先生は「現在『日本書紀』に書かれている通りを信じて古代日韓関係史を研究する人はいないだろうし、南韓経営説を論ずる研究者はほとんどいない」とおっしゃいました。それにもかかわらず、日本の中学校・高等学校教科書の中ではこのような南韓経営説を連想させる表現がいまだに残っています。例えば、562年に加耶が滅亡しますが、『日本書紀』には「任那滅亡」と出ているでしょう。そして、「倭が朝鮮半島、任那から撤収した」というような表現がさまざまな教科書に出ています。学界では論議とならなかった話が教科書にはそのまま書かれているということは、学界の研究成果が教科書に反映されていないということを示しているのではないでしょ

うか。これを単純に、学問の自由とか表現の自由ということで後回しにできるのか、これに対する考えをお聞きしたいと思います。

石井　佐藤先生がお答えになる前に、私も盧先生にお聞きしたいのですが、同じような状況が韓国では起こっていないのでしょうか。学界での状況というのは、すべて教科書に正しく反映されていますか。

盧重国　もちろん学界の見解が 100%反映されてはいません。現在、私たちの教科書では問題となっていますが、二種類あります。前近代までは国定教科書が一つです。近現代史は検認定教科書で、現在五種類程度が出されています。検認定教科書では多様な見解が提示されています。そこで、学界では国定教科書も可能であれば検認定教科書にしようという意見が多くあります。

濱田　ここは歴史教科書検討委員会ではなく、私たちは４・５・６世紀の日韓関係を史料に基づいて検討してきたわけです。また、今後の日韓関係史の研究方向をどう進めていくかという議論を深めて集中させることによって、長い目で見れば、盧先生がおっしゃるような危惧も極めて小さなものになり、やがては消えていくと私は思っています。確かに、どちらの国の歴史教科書にしても、あるいは歴史参考書や歴史書物にしても、それぞれに現代から見れば首をかしげたくなるものがないわけではないですが、それよりも、私たちは研究者であり、歴史の史料を優先的に使って研究できる立場ですので、その方向から議論をしていきたいと思います。

盧重国　私が問題を申し上げたのは、佐藤先生が「近年では任那経営説のようなことを学界で主張する人はほとんどいない」と発言されたからです。それならそのような学界の研究成果が教科書に反映されるべきにもかかわらず、全く反映されていないのです。

学界の研究成果からは任那経営説はほとんど言及されていないと聞いた時は、学界である程度整理されたものと感じましたが、実際には、教科書に「562 年に軍隊が撤収した」と書かれています。ということは、それ以前までは軍隊が任那に残っていたということが前提となっていると理解できます。しかし、学界研究成果では「そのようなことはなかった」と最近大多数の見解が固まっているということなので、なぜ両者間にそのような相違があるのかをお聞きしたかったのです。

佐藤　先ほども申し上げたように、私は『日本書紀』の史料批判をしないで『日本書紀』そのままに朝鮮半島南部経営説のような見解を持つ人は、現在はあまりいないのではないかと思っています。ただし当時の倭国と加耶との間には、経営・支配・占領・勢力・影響力・軍事的支配・関係など多様なレベルの実態としての関係があったことは間違いではなく、深い関係があったと思います。しかし、もっとも日本書紀的な経営支配から、もっとも日本書紀的ではない淡い関係に至るまで、いろいろな学説があり得る状況であり、その中で「これが正しい」という結論は残念ながら今の日本の学界には無い状況です。ですから、歴史的事実に近づくためにはどうしたらよいかということを今この研究会で話しているのです。そういう決定版の説のようなものがまだ築かれてないということで、金鉉球先生の「昔の説がまだ残っている」という発言と、私の「今では昔のような南部経営説をそのまま唱える学者はいない」という発言は、表裏の関係になるでしょう。

ただし、最近の研究でいえば、鈴木靖民先生だとか、あるいは濱田先生や石井先生が論じておられる日韓関係の研究成果も概説書もあるわけです。例えば講談社の『日本の歴史』や吉川

弘文館の『日本の時代史』、最近では東京大学出版会の『日本歴史講座』などに見られる説が、決定版とは言えないかもしれないけれども今の日本の研究の現状を示しているのではないかと思っておりまして、その見方は必ずしもかつての枠組みがそのまま残っているというものではないと考えるのですが、いかがでしょうか。

もう一つ、私は金鉉球先生と同じく『日本書紀』をどう史料批判しようかということで問題を設定していますが、やはり『日本書紀』に書かれていることを否定する場合には、何らかの根拠となる歴史資料や材料が必要だと思います。何らかの根拠なくして歴史観だとか、金先生や私も申し上げたような近代的な思い入れで『日本書紀』を否定するわけにはいかないわけです。その材料をどこに求めるかというときに、やはりきょうお話ししたような新しい考古学的成果や出土文字資料などに負うことが多くなるのではないかと考えています。

濱田　金鉉球先生は『日本書紀』を客観的に検討するということですが、その「客観的に」というのはどういう手法なのでしょうか。佐藤先生のおっしゃるように、出土文字資料などの対応する史料があれば両者を比較できるのですが、これがない場合は非常に困難です。「客観的に」といろんな方が言うのですが、そのこと自体が大変難しいことで、韓国で最も『日本書紀』をお読みになっておられる金鉉球先生が「こういうのが客観的な手法だ」と教えていただければ参考になるのですが。

『日本書紀』を引用しないことは、逆に過去の通説を認めることになるのではないか

金鉉球　先ほど佐藤先生がお話しされたことを再び繰り返すことになりますが、石井先生が指摘されたように、結局、佐藤先生と私の考えはそれほど違わないようです。先生は、「『日本書紀』を過去に解釈していたように読む人は一人もいない。むしろ最近は『日本書紀』を引用しようとしない傾向にある」とご指摘なさり、解釈の方法として、「考古学的な資料や木簡などの資料が出れば、それを利用して新たに解釈をすべきだ」と言われました。これに対しての私の意見は逆に、過去の『日本書紀』に対する通説的見解が違っていると言う人もいますが、今でも信じている人もいて、『日本書紀』を引用することを避けているということは、暗黙のうちに過去の見解がそのまま認定されているように見られる危険があるのではないかという考えです。過去の通説を引用しないという話ではなく、『日本書紀』をこれ以上引用しようとしないことで、過去の通説が暗黙のうちに認定される危険性がある。私は、『日本書紀』を土台とした、末松氏が提起したような通説にはさまざまな問題があると思います。その土台となる『日本書紀』も引用を避けることによって、反対に昔の通説がそのまま黙認される可能性があると考えます。

石井　何も触れないから、何も触れないことが逆に、昔の考えがそのまま残っているというふうに受け止められてしまうということですね。

金鉉球　それが一つです。現在、『日本書紀』を土台として過去の通説が黙認されている可能性がある問題について、まず『日本書紀』に対する過去の引用が誤っていたことを正してから、考古学的成果であるとか木簡等を受け入れなければならないと考えます。まず『日本書紀』自体に対する史料批判をしなければなりません。

これに対し濱田先生は、ではそれに該当するものとしてどんなものがあるのかとお聞きにな

りました。さきほど、過去の末松説などの話が出ましたが、『日本書紀』のみで論じるならば、「任那を中心として朝鮮半島との関係が成り立っていた」というよりも、百済との関係を中心として成り立っていたと解釈できるのではないでしょうか。また百済との関係も、過去に言われたような支配・服属という関係ではなく、実際は百済は先進文物を提供し、大和政権は軍事援助を提供するというような関係だったと考えられます。『日本書紀』によって論じなければならないときは、少なくともこのように論じるのが正しいのではないでしょうか。

『日本書紀』編纂過程の検討が必要

濱田　『日本書紀』には４世紀の部分、５世紀の部分、６世紀の部分、７世紀の部分と、大変長い時間での日韓関係史が記録されています。「通説のように」とは、どうも４世紀あるいは５世紀のことを念頭に置いておっしゃっているのではないかと思います。私も金鉉球先生の論文を読み、百済と倭国との関係では、倭国と任那（加羅）の幾つかの国々との関係ができているというような構造は基本的に同感しています。そして「ＡＳＥＡＮとかＥＵの関係で東アジア世界も地域的な協力と統合を目指して」という部分の「東アジア地域も地域的な協力」というのは、まさに古代史では百済・加羅諸国・倭国がそうではなかったかと思うのです。この地域的な協力関係は、その背後には高句麗と新羅の協力関係との対立軸があって、その外には広く中国の南北朝、五胡十六国といった枠組みで百済・加羅諸国・倭国との地域的な協力関係あった。これが古代の日韓関係の基本軸ではなかったのかというのが、いろいろ文献史料を読んで得たものです。

それから、改めて４世紀・５世紀の『日本書紀』における日韓関係を読んでみたのですが、やはり『日本書紀』を批判するときは『日本書紀』の編纂過程とか材料から検討していかなければならないと思います。記事一つ一つを検討するのも一つの方法で、氏族から出された『旧辞本紀』、あるいは『帝紀』、あるいは百済三書（百済記・百済新撰・百済本記）といったものが材料にあるとよく言われます。これを読みながら私が不思議に思うことは、人と場所はよろしいのですが、人物が話した内容や相手の対応まで漢文調で書かれており、この材料はどういうことだろうかということです。５～６世紀の日本で文字記録がしっかりと残していくことができたのか、あるいは氏族の伝承記録や歴史の事柄の記憶が物語として語られていき、ある時期に文字化されたのか。この点が私には不明なのです。『日本書紀』の編纂に関する研究というのは歴史学以外の分野です。神話の部分については「一書に曰く」ということで『日本書紀』における一書の研究という成果もあるようなのですが、『日本書紀』の古代日韓関係記事の編纂材料、編纂過程というのをまずしっかりと押さえ、その上で客観的な検討というものが進められるべきだろうと思います。佐藤先生、いかがでしょうか。

佐藤　私も今回の金鉉球先生の話題提供は大変重要であると考えておりまして、あるいは石井先生や濱田先生が言われたように、『日本書紀』自体の研究も大切であるという認識は変わりません。特に、編纂過程の研究を進めることや、記事が持つ矛盾を突くなど、『日本書紀』によって『日本書紀』を史料批判することは、歴史研究者として行わなくてはいけないことだと思います。

ただ、日本の律令国家ができてくるという大変重要な時期である７世紀を例にとれば、『日

本書紀』の史料的な重みは相対的には低下したのではないかと思っています。なぜ低下したのかというと、木簡によって『日本書紀』を史料批判することで歴史の真実に近づくことができるようになったからだということと、各地の７世紀代の遺跡発掘、特に木簡によって『日本書紀』に書かれている記事の実態を知ることができるようになったからです。

木簡や金石文などの出土資料や、『日本書紀』以外の文献である中国史料などにより、６世紀に関しても史料批判が行われました。例えば、『日本書紀』には6世紀のこととして記載されている「任那日本府」という言葉がありますが、中国史料や金石文・木簡など７世紀の資料によると「日本」という国号が生まれたのは７世紀後半だというのが今では多くの日本古代史研究者の認識になっています。これによって「任那日本府」の「日本」という言葉は『日本書紀』の編纂過程に付けられたということが常識化したと思います。私はやはり、史料批判するときには、その根拠となる歴史史料がなくてはならないので、『日本書紀』を調べることと同時に私がそれ以上に期待しているのは、考古学的な調査成果や出土文字資料、あるいは同時代資料、あるいは最近では６世紀の文字資料が出土するようになったので、それらによってこれからは大いに6世紀代の『日本書紀』の史料批判ができるのではないかということです。

過去の通説を残さないためには、史料批判が先決ではないか

金鉉球　結局、濱田先生と佐藤先生のお話は、「『日本書紀』の編纂過程を重視すべきである」、「別の資料を参考にしなければならない」という二点に要約できると思います。ところが逆に、そのような理論を土台として『日本書紀』の利用を避けることが、過去に『日本書紀』を誤って解釈して立てた通説を黙認していることとなり、それが教科書に載せられ、現在の問題となっているのです。したがって、別の文字資料を利用し『日本書紀』を批判することももちろん重要ですが、まず基本として、『日本書紀』の記事を過去に誤って見てきたことへの批判をすることが先決ではないでしょうか。

例として、先ほどもお話ししましたが、『日本書紀』に基づいて解釈すれば、日本は任那との関係が中心ではなく百済との関係が中心であり、百済との関係も支配・服属的な関係というより、先進文物を受け、軍事援助を与える関係でありました。

記事を例にとりますと、神功49年条は、『日本書紀』に基づき精密に見ると百済の話であり、日本の話ではないのです。少なくともこの程度の批判がされるべきないでしょうか。その上で次に、なぜ百済の話が日本の話となったのか、なぜ七国平定という表現が出たのかなど、編纂過程等の検討を通じて二次的な批判がなされるべきだと考えます。

濱田　最初の金鉉球先生のお話がなかなか理解しづらく、失礼ながら屈折したとらえ方だと感じていました。「『日本書紀』を使わないということが暗にその通説を認めていくのではないか」というお考えです。

先生は一まとめに『日本書紀』と言っていますけれども、例えば「高句麗から来た学者が聖徳太子の先生になった」ことなどは、文化の渡来として『日本書紀』そのままに教科書にも反映するわけです。『日本書紀』といっても、先ほど言いましたように 300 年、400 年間の日韓関係を記述していますから、どの部分が『日本書紀』自体の中で矛盾があるかということになってくるかと思います。

金鉉球　先ほどお話ししたことが少し誤って伝わったようですので、繰り返して申し上げますと、濱田先生と佐藤先生のご意見は「編纂過程であるとか別の資料を参考にしてこそ、『日本書紀』を批判できるのであり、そのまま引用することは大変難しい」というものでした。それは妥当なお話ですが、それ以前に『日本書紀』自体がどのように書かれているのか検討する必要があります。神功紀 49 年条を例にとりますと、津田先生や池内先生のいうように「主体は日本である」とすると矛盾だらけになるという説明をしましたが、私をはじめ普通の常識を持ってその記事を読めば、それが百済側の話であることは誰もが認めざるを得ないと思います。したがって、このような批判がまず必要です。なぜ百済のことが日本のことになってしまったのか、または「平定」という表現は正しいのかなど、編纂過程等によって批判するべきなのです。ですので、まず我々が記事自体を再検討する必要があるのではないかというのが私の考えです。

金泰植　それでは、簡単に一言ずつお言葉をいただいて昼食時間とすることにしましょう。

盧重国　古代日韓関係を研究するとき、『日本書紀』をどのように見なければならないかということを主題として議論いたしましたが、佐藤先生は『日本書紀』を客観的に史料批判することが必要だという原論的なお話で、金鉉球先生は、従来の任那中心、加耶中心として見てきた認識を、百済中心として見直そうという新たな視角を提示しました。これによって描かれる歴史像は、ある程度相違があるようです。金鉉球先生の百済中心という認識に対して日本の先生はそれをどのように受け取られているのか、お考えをお聞きしたいと思います。

濱田　佐藤先生の言葉にもありましたが、関係史というのは、百済史を考えるときは百済の視覚で「百済は、なぜこの時期に倭国とこういう交渉をしたのか」という方向から理解し、倭国は倭国の立場で「この時期に百済とこういう交渉をしているのはどういう意味を持っているか」という方向から理解するという双方向的な見方があるわけです。『日本書紀』は非常に百済関係記事が多いのです。金鉉球先生はこれを百済史の立場で読めるし、読めばこういう日韓関係史ができるという示唆ですから、双方向に成り立つということです。

佐藤　私も大きな目で見ると、私と金鉉球先生の間でそれほどの違いはないと思っています。

しかし、私はやはり『日本書紀』に書かれていることは8 世紀はじめの日本律令国家の歴史認識であり、その基になっているのは百済系の史料というふうに見ています。私が問題にしているのは「8 世紀はじめの日本律令国家の歴史認識を史料批判もせずにそのまま信用してもよいのか」ということです。つまり、金鉉球先生は「誰が見てもそう思う」と言われたのですが、そこには『日本書紀』が語っていることとは別のファクターがあるのではないかと思っています。ご承知の通り、戦後の日本の古代史研究は『日本書紀』をそのまま信ずることへの批判から始まりましたので、私たちが説明していることを金鉉球先生は理解してくださるのではないかと思います。

「かつての通説が暗黙的に残ってしまうのではないか」という金鉉球先生の危惧については、現在いろいろな意見が並立しており、かつての末松先生の見解のような圧倒的決定版の論旨に当たるものがないことへのご批判だと思います。これは今の研究状況から言いますと、最近の日本史通史の本や講座の本などにそれぞれご専門の先生方が書かれているような見解というのが、少し幅はあるにせよ、学界では共通に認識されていることといえます。今の段階はそういう段階であるとしか申し上げられないのではないかと思っています。

金泰植　では、６世紀に関連した座談会はここで終わりとします。今までの論議の中で４世紀、５世紀、６世紀の論議が足りなかったと考えられる面もありますし、将来私たちが日韓関係史をどのように見ていくべきかという問題に対する論議も続けねばならなりませんので、ここで少し休憩を入れて次の会議を続けることとします。